

兵庫 J C C

兵庫県協同組合連絡協議会機関誌

■ 第 20 号
 ■ 1992年 4月20日発行
 ■ 編集発行

兵庫県協同組合連絡協議会
 Hyogo-ken Joint Committee of Co-operatives

■ 編集事務局
 〒650 神戸市中央区海岸通1番地
 兵庫県農業協同組合中央会
 TEL. (078)333-5888

協同組合活動スナップ



▲(生協) コープこうべ第4地区が三原町農業研究グループと「のうぎょうトーク」
 <コープこうべ生活文化センターで、1月>



▲(農協) とっても新鮮おいしいよ
 土曜の「昼市」すっきり定着
 <JA神戸市西岩岡支所で>

県漁婦連の第6回「魚のアイデアコンクール」
 魚ざらいの人でもこれなら

▼(漁協) <県漁連淡路支所で、3月>



県内の森林組合職員が労働災害防止のため
 研修会開く

<県森林会館で、1月>

▼(森組)



目次	1. 協同組合活動スナップ.....1	6. 世界をみつめる国際情報..... 8
	2. モノの交流から人びとの交流.....2	~アメリカ最大の生協の倒産に学ぶ~
	3. 協同組合運動への提言.....3	7. 協同組合運動の展開と協同組合原則を巡って..... 9~10
	東京水産大学 資源管理学科 馬場 治	~日本協同組合学会第11回大会参加報告~
	4. いま協同組合では〔活動紹介〕.....4~5	8. 協同組合運動に生きる
	生協、農協、漁協、森林組合	篠山町農業協同組合 情報開発室室長 瀬戸洋美
	5. '92 ICA東京大会をめざして.....6~7	9. 協同組合研究短信<No.5>.....12
		~賀川豊彦研究~

モノの交流から人びとの交流

～第15回協同組合間提携全国交流集会に参加して～

生協、農協、漁協、森林組合の全国組織などで構成する協同組合間提携推進事務局が主催する第15回協同組合間提携全国交流集会が、「協同組合間提携の到達点と多面的提携の可能性」をテーマに、前回からおよそ3年ぶりに3月6日、7日の両日、東京・農協ビルで開催されました。

真に豊かな社会とは

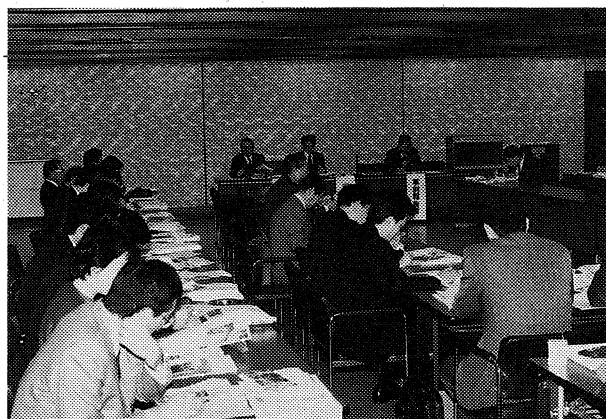
冒頭の記念講演で、岸本重陳・横浜国立大学教授は「真の豊さとは、安心して暮らせ、やすらぎがあることだ。しかし、日本にはそのやすらぎがない。とくに日本の食糧危機は決定的な問題である。」と指摘しつつ「協同組合のもつ組織的・原理的特性から、これからの時代に、協同組合への期待が高まるだろう」と協同組合の役割を強調しました。



記念講演をする横浜国立大学・岸本教授
(東京・農協ビルで)

深く、広く、前進する提携事例

この交流会には、参加者や提供された資料から数多くの提携事例が報告されましたが、いず



分科会では活発な意見交換がされました

れも協同組合間提携が拡がりを見せていることを示すものでした。

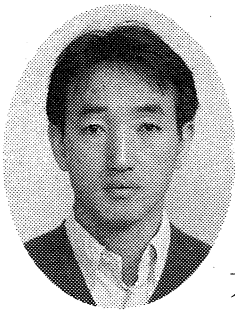
そのなかで、日生協の全国生協産直調査(118生協が協力)によれば、この10年間で生協の組合員は2.1倍、事業高は1.9倍に伸びましたが、青果物の供給高はそれらを上回って2.2倍、さらに「産直」での青果物の供給高は3.4倍にもなったことが明らかになりました。

また、量ばかりだけではなく、「フードプラン」や「コープエコロジープログラム」など従来なかったレベルの取り組みが始まっていることとあわせて、モノの取引きだけに終わらせず、消費者と生産者が互いに生活者として共生しようとする方向性がみられることも指摘しています。

このほか、北海道漁婦連の「お魚殖やす植樹活動」や熊本県小国町森林組合の「悠木の里づくり」などが紹介されるなど、環境問題への協同組合の取り組みが紹介されました。

総じて、全国的な取り組みは商品を媒介にした提携交流であり、兵庫JCCの総合的な交流を主とした取り組みとの違いを感じた交流会でした。
(兵庫県生協連・平松)

協同組合運動への提言

漁協組織・機能の
形骸化と見直し～生産をとりまく
環境変化の中で～

東京水産大学

資源管理学科 馬場 治

最近、大都市あるいはその近郊に立地する沿岸漁業地帯における漁協組織とその機能の形骸化が指摘される。共販体制はとらず、業種別に決められた年間定額の賦課金を生産者に課すだけで、実質的に漁協資産の管理を主たる業務とするような漁協もある。そこでは、生産者自身が市場情報を手がかりに直接自分で消費地市場に出荷し、なかには生産だけでなく流通面での機能強化を図る者も少なくない。輸入水産物の増加や流通チャンネルの多元化などの生産と消費をとりまく複雑な環境変化は、漁協あるいは生産者に新たな対応を迫るようになってきたが、これに対する漁協の対応は現状では十分とはいえない。

その一方で、漁協という組織よりも小回りのきく生産者個人の方が適切な対応をとりやすい場合もある。そこでは、個人の生産・出荷戦略を貫こうとすれば、漁協は不必要あるいは障害となる場面すら出てこよう。豊富な情報と消費地に近い都市部の漁業者は、それらの情報を利用して個別の生産・出荷戦略をとる上でより有利な条件にあるという点で典型であるが、都市部に限らず漁協は生産・出荷に関与して機能する場を失いつつあるようだ。

もちろん、現実的には漁協の存在が不可欠な産地がまだまだ多く、また漁協の機能が単なる集出荷機能だけではないことを考えれば、その存在意義が簡単に失われることはないであろう。しかし、漁協が生産者の生産活動（出荷も含めた）への関与を弱めることは、生産者組織としての漁協の存立基盤を危くする。

このような現実が進行する中で、いま漁協に求められているものとして、第一に生産者への市場・商品情報の提供とそれに沿った販売体制の整備、第二に消費者への商品情報の提供による生産者からの消費者への積極的な接近、第三に単に生産者としてではなく市民として様々な問題に対する認識を共有する場をつくっていくなどの点が考えられる。第一と第二の点は、産地としての生き残りを図る上で生産者組織として期待されている役割であり、従来から指摘されている点である。一方、第三の点は単なる生産者の組織としてではなく、市民として環境問題等に対する認識を共有する運動の必要性をいったものである。この点では、生協などとの協同組合間提携を売り手と買い手の関係としてだけでなく、環境問題等に対する共通認識を得る場として位置づけることも必要である。今後の漁業の存続のためには、漁業の環境保全型産業としての位置づけを積極的にアピールしていくことが不可欠となろう。

いずれにせよ、要求されるこれらの機能の実現には、漁協の情報収集及び発信能力が大いに求められるところである。その能力が十分に発揮され、成果が得られるためには漁協組織の見直し、職員の資質向上のためのプログラム作り、漁協間ネットワークの構築などの条件整備が重要な課題となる。

いま協同組合では 活動紹介

生協

ベーシック・バリュー を学習

I C A 東京大会のメインテーマである協同組合の基本的価値を検討しようと、県下の生協では学習会を開催しています。

県生協連は、昨年12月の第1回を初めとして協同組合研究会を隔月に開き、生協関係者ばかりではなく研究者や農協関係者なども交えて学習をすすめています。第1回は、昨年10月ドイツの旧東ベルリンで開かれた I C A 中央委員会の報告で、世界の協同組合がその自立性を保つことの困難さや財政上の危機に陥っている、などとのマルコス会長の指摘について学習しました。

第2回は、日生協の栗本昭・国際部長を招いて、基本的価値についての国際的な検討経過や現状についての報告を聞いたほか、東京大会で基



ベーシックバリューの学習冊子

調報告となるベーク氏の見解について検討しました。
この研究会のほか、コープこうべでは、同生協の職員有志がまとめた『生協が大切にしている価値って何?』——コープこうべのベーシックバリューを考える——と題した小冊子を教材に、全職員が協同組合の基本的価値について学習をすすめています。

農協

県下にひろがる 「ひょうごっ子兵庫米」の 学校給食

兵庫県産米を使った、よりおいしいご飯で米飯給食の回数を増やしていこうと、兵庫県下で「ひょうごっ子兵庫米給食推進事業」に取り組んでいる J A (農協) が、三田市、加古郡の稲美野、加西市、多紀郡の篠山町など、平成4年4月で7組合と、しだいに広がってきました。



ご飯の給食おいしいな(加西市北条小学校)

この事業は、①学校給食に使われる米を、おいしい兵庫米(地元産米)へきりかえる、②米飯給食の回数を県平均で週3回以上に増やす、③全市町の米飯学校給食の実施をすすめる——などがねらいです。

県内では91市町の内、現在85市町の全小・中学校940校でとりくまれています。そのほとんどが政府米(他府県産米)であり、今後この事業による兵庫米の普及に大きな期待が寄せられています。

平成4年1月からスタートした加西市では、市内の13の小・中学校で週3回実施されて、地元産の「日本晴」を業者に委託炊飯してセンター方式でとりくまれています。学校の児童・生徒たちや、先生も「やはり地元産米はおいしい。冷めても味がおちない。」と好評です。

漁協

コープこうべの店舗で
「イカナゴのくぎ煮」料理教室

春の訪れとともにイカナゴのくぎ煮の季節がやってきました。この時期になりますと瀬戸内地方のあちらこちらの台所から、甘辛い香りが漂ってきます。濃い飴色に煮立てたものは色も味も絶品で、酒のさかなにご飯のおかず欠かせません。最近では、市販のものより自家製のものに人気が移っています。当県漁連でも「失敗しないイカナゴのくぎ煮」と銘打って、くぎ煮の料理教室を行っています。今年度はコープこうべ第6、第7地区を中心に3月の中旬から4月の中旬にかけて約20店舗を県漁連の魚食スタッフが走り回っています。出来あがったくぎ煮の評判も上々で、教室終了後組合員さんが早速イカナゴを買って帰られる様子にホッとするやら、うれしいやらです。

イカナゴのくぎ煮を上手に仕上げるポイントは、①イカナゴは鮮度の良いものを選ぶ、②厚手の深い鍋でたく、③煮汁が少なくなるまで強火で一気に炊く、④一回に煮る量は1kgまで、⑤煮上がるまではお箸でかき混ぜないことです。

以上のポイントに注意してどうぞお試しください。

なお、「失敗しないイカナゴくぎ煮」のパンフレットをご希望の方は

県漁連指導部（☎078-652-3424）までご連絡下さい。



森組

緑づくりのため植林、
手入れに励む林業者

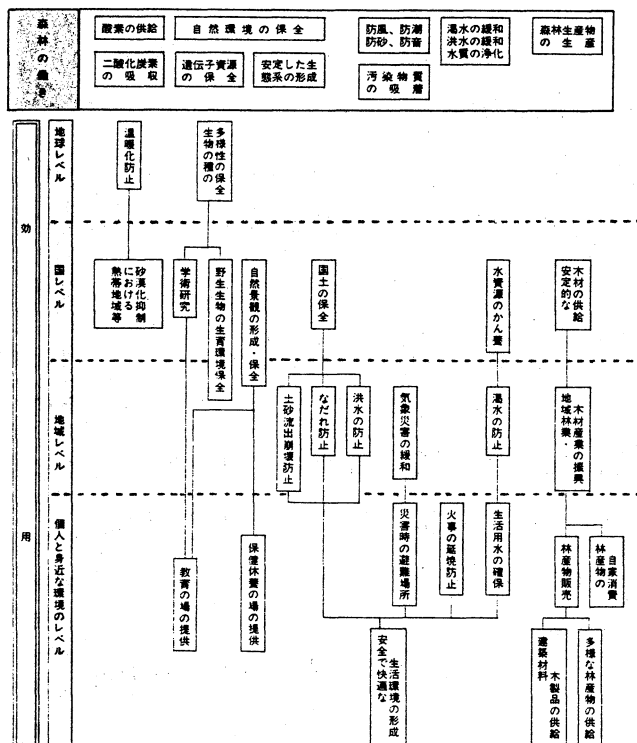
森林が、本当に木材生産の場として国民的評価を受けるためには、まだ10~20年の歳月を要することと思われます。

いわゆる戦中・戦後にかけて伐り尽くされた森林も、今日では全国で1,000万haを超す人工林として生まれかわっていますが、まだその6割までもが若齢に偏っており、資源として成熟するまでに至っていない状態にあるからです。

そのためもあり、いま森林を語るとき、えてして森林のもつ公益的機能面の効用が中心になりがちですが、森林・林業にかかわりをもつ者としては、山のみどりが、木材供給の主役として広く国民的に認識され直す日の一日も早らんことを念じつつ、ただ黙々と木を植え、その植えた木の手入れを続けているのです。

心豊かな生活の場づくりのため、林業者は今日もこつこつと、緑づくりに励んでいます。

森林の働きとその効用



'92 ICA東京大会をめざして

大会日程と議題

私たち協同組合の世界的機構であるICA（国際協同組合同盟）の大会が、本年10月にアジアで史上初めて東京で開催されます。

この大会は、ICAの最高意思決定機関として4年に1回開催されており、今回で30回目を迎えます。そこで今回は、第30回ICA東京大会の日程や議題の予定を紹介します。

大会は、本大会・中央委員会や各種専門委員会によって構成されており、加えて自主的に行われているいくつかのフォーラムが予定されています。

大会の前段では各種専門委員会が

大会日程は7ページのとおりで、14の専門委員会が生協、生協事業機構、漁協、保険、銀行住宅、労働者生産、旅行、女性、教育研修、広報、調査、図書と、職能・機能別に分類されています。これらは自主的に運営され、1日にいくつかの委員会が同時に開催されます。委員会によっては、執行委員会・小委員会ならには地域別会合なども持たれる予定です。

これらの専門委員会では、それぞれ固有の検討課題をもち、活発な討議が行われてきていますが、今回は共通課題として「基本的価値」、「環境問題」が中心テーマです。

中央委員会ではICA定款改正を上程

中央委員会は、4年に1回の大会と、大会の



間に各年この大会方針を実行すべく各国の中央委員が出席して開催されています。

大会開催時では、ICA定款による4年任期の役員改選が行われていますが、東京大会ではICA機構改革にもなる定款改正が上程される予定です。

大会の議題と採択

東京大会のテーマは「協同組合の基本的価値」と「環境と持続的発展」の2つに大きくわかれます。そのなかで、ICA機構改革にもなる定款改正と、いくつかの決議採択がなされます。

2大テーマの1つである「協同組合の基本的価値」については、'88年の前回ストックホルム大会で提起されて以来検討が重ねられ、ICAより研究委託されたベーク氏による報告書とあわせ議案として上程され、大会席上で代議員の意見開陳が行われたあと、最終的に決議または勧告採択をもってとりまとめられます。

また、もうひとつのテーマである「環境と持続的発展」については、すでにその実行が世界的に問われているとの認識から、実行計画を伴う「ICA東京大会環境宣言」（仮称）が採択される見通しです。

兵庫 J C C

現地視察や歓迎行事も

ほとんどの専門委員会では、それぞれ目的別に現地視察が生まれ、懇親レセプションが開催されます。これは、専門機能にそれぞれ合致した大会組織委員会構成団体（日生協・全漁連・全森連・全中・全農など）のそれぞれのイニシアチブによって準備がされることになっています。

また、開会式典や公式歓迎レセプションなども予定されており、会期中の日曜休日は都内観光や交流集会も計画されています。

私たちはこの大会を機に、「基本的価値」という協同組合の原点論議を通じて、組合員および役職員の間に組織結集につながる仲間意識を高め、協同組合事業発展の基本的なよりどころを確認しあえれば——と願っています。

ICA東京大会日程（於：新宿・京王プラザホテル）

年	月	日	曜	午 前	午 後
1992年	10月	15日	(木)	ICIF（保険連合） CIDB（協同組合保険開発局）会議	ICIF（保険連合） CIDB（協同組合保険開発局）会議
		16日	(金)	ICIF（保険連合） CIDB（協同組合保険開発局）会議	ICIF（保険連合） CIDB（協同組合保険開発局）会議
		17日	(土)	ICRB（国際協同組合再保険局）会議	ICRB（国際協同組合再保険局）会議
		18日	(日)		ICIF（保険連合）執行委員会
		19日	(月)	ICIF（保険連合）執行委員会	AECI（欧州協同組合保険協会）執行委員会・NAA（北米協会）執行委員会
		20日	(火)	CIDB（協同組合保険開発局）フォーラム	AECI（欧州協同組合保険協会）総会 NAA（北米協会）総会 AOA（アジア・オセアニア協会）総会
		21日	(水)	ICIF（保険連合）総会	ICIF（保険連合）総会
		22日	(木)	ICIF（保険連合）総会 ICIF関連5会議 女性委員会本会議 銀行委員会執行委員会 生協委員会執行委員会 農業委員会執行委員会 農業委員会経済小委員会執行委員会 調査作業部会執行委員会 広報作業部会執行委員会	ICIF（保険連合）総会 ICIF関連5会議 女性委員会本会議 銀行委員会本会議 生協委員会本会議 漁業委員会執行委員会 住宅委員会執行委員会 広報作業部会本会議
		23日	(金)	ICIF（保険連合）総会 女性委員会大会 漁業委員会本会議 農業委員会本会議 住宅委員会本会議 教育研修委員会執行委員会 旅行委員会執行委員会	ICIF（保険連合）総会 女性委員会大会 漁業委員会本会議 農業委員会本会議 住宅委員会本会議 教育研修委員会本会議 旅行委員会本会議 広報作業部会編集会議
		24日	(土)	生協事業機構執行委員会 労働者生産委員会執行委員会 ICA執行委員会 監査・管理委員会 図書資料作業部会執行委員会 国際協同組合貯蓄信用協同組合連絡委員会執行委員会	生協事業機構本会議 労働者生産委員会本会議 ICA執行委員会 国連代表者会議 図書資料作業部会本会議 国際協同組合貯蓄信用協同組合連絡委員会本会議
		25日	(日)	(都内観光)	
		26日	(月)	専門機関委員長会議	ICA中央委員会 新規会員歓迎会 (歓迎レセプション)
		27日	(火)	ICA大会	ICA大会
		28日	(水)	ICA大会	ICA大会
		29日	(木)	ICA大会	ICA中央委員会 (歓送夕食会)
		30日	(金)	ICA大会	ICA大会

世界をみつめる



アメリカ最大の生協の 倒産に学ぶ

1988年、アメリカ最大の生協であったパークレー生協が倒産した。このニュースは日本の生協関係者に大きなショックを与えた。というのも、パークレー生協は長い間、日本の生協にとってはヨーロッパの生協と同様に生協運動の目指すべきモデルのひとつであったからである。事実、日本の生協関係者は、パークレー生協から多くのものを学んだ。コープ商品、ロゴ、スーパーマーケット経営、消費者情報・教育、組合員活動等、現在の生協運動では当たり前になっているものも、パークレー生協の影響を強く受けている。日本生協連は、この貴重な経験を教訓とすべく、関係者に倒産に至る経過とその原因について執筆を依頼した。今年1月、この翻訳が完成し、コープ出版から「パークレー生協はなぜ倒産したか」というタイトルで出版された。

本書は倒産の原因を、当時の直接の関係者（理事長、理事、ジェネラル・マネジャー、組合員、職員等）が、さまざまな角度から分析したものである。原因の指摘は各筆者の当時の立場によってさまざまである。理事会内部の2派閥による激しい主導権争い、その結果としての政策の不安定性とジェネラル・マネジャーの頻繁な交替、職員の士気の低下、組合員を無視した政策決定、教育の軽視等々。生協がこうした問題を抱えるにつれて、組合員は「他のスーパーと同じになってきた」と不満を持ち始める。

「生協らしさとは何か」との問題が提起される。また、かつてのジェネラル・マネジャーのひとり、倒産の原因として、そもそも「生協の民主的な構造が食品小売業に向いていない」と結論している。1生協1店舗というのが普通のアメリカの生協陣営にあって、12のスーパーマーケットを経営し、10万を超える組合員を擁するパークレー生協は、並外れた規模であった。



民主主義の国・アメリカでさえ、民主的運営を全うし、同時に民主性と効率性のバランスを保つことがいかに難しいかということを示すものと言えよう。

パークレー生協の倒産は、まさに現在論議されている「協同組合の基本的価値」を問う問題である。本書が生協だけでなく、他の協同組合関係者にも広く読まれ、基本的価値論議の一助となることを願うものである。

（日本生協連合会国際部 長谷川美智子）

購入希望の方はコープ出版にお申し込み下さい。
電話：03-3497-9198／定価：2,060(送料別)

協同組合運動の展開と協同組合原則を巡って

～日本協同組合学会第11回大会参加報告～

昨年10月19日・20日の2日間、第11回日本協同組合学会大会が宮崎市古城町の宮崎産業経営大学・経営学部学舎で開かれた。以下は(すでに半年も経過し記憶もうすれかけた中での)時期はずれのレポート――。

この大会には、韓国協同組合学会の代表も加え、日本全国から研究者や各種協同組合・役職員ら約150人が参加した。11回目を数える今大会の共通論題は「協同組合運動の展開と協同組合原則 ― 基本的価値と実践のかけ橋の視点から ―」。

初日は、この共通論題に基づくシンポジウムが中川雄一郎座長(明治大学政経学部)のもとに行われ、佐藤誠氏(立命館大学国際関係学部)による「ICAにおける協同組合6原則をめぐる今日的総括」など4つの報告と、それに対する4人のコメンテーターのコメント、報告者の回答、一般討論が行われた。

2日目は、韓国協同組合学会会長の金榮喆氏(建国大学畜産経営学部教授)による特別講演「Some Experience of Cooperative Movement in Korea (韓国における協同組合運動の若干の経験)」のほか、3会場・計20の個別報告が行われ、それぞれ討論が行われた。

学会なるものに初めて参加してみて“何とまあ短時間に各種テーマの報告がたくさん行われるものよ”と感心したが(それでもこの学会は報告数の少ない方のようなのであるが……)、それだけに、それらを帰納的に焦点を絞って概括することは(私には)むずかしい。

そこで、シンポジウム座長の問題提起をかなり強引に要約・紹介し、今大会の共通テーマの設定に至った経過と日本協同組合学会の今日の主要な関心のありか(の一端)をお伝えする。

ICAの動きに呼応した

学会のテーマ設定

1. 学会は、これまで3回にわたり、わが国の協同組合運動の現状を踏まえ、「協同組合の基本的価値」をベースにした独自の課題を設定し、「基本的価値論議」の発展に貢献してきた。これらはレイドロウ報告を視野に入れ、「ICA基本的価値プロジェクト」座長のベーク氏の研究作業を考慮したものであった。
 - (1) 1990年5月「協同組合の基本的価値をめぐって ― マルコス報告の背景と検討課題 ―」
 - (2) 1990年10月「協同組合の現段階的組織特徴と基本的価値」
 - (3) 1991年5月「協同組合の資本形成をめぐる諸課題―基本的価値論議との関連で―」
2. ベーク氏は「価値と原則(協同組合原則)との関係」について分析し、それに基づいて3つの範疇で表現される「伝統的な価値」に「新しい優先度を付与する」ことを明らかにしている。

「伝統的な価値」の3つの範疇とは、①社会的価値(社会全般についての一般的な協同組合の理念)、②組織的価値(協同組合の組織方法の価値)、③道徳的・倫理的価値(「協同組合人」と「協同組合文化」についての価値)であるが、ベーク氏は②の価値を主に強調している。

3. ベーク氏は「協同組合原則は②のタイプの価値を奨励・勧誘するための主要な行動の規則」であって、「間接的には、協同組合原則は①と③の価値の助長を意味する。」と位置づけ、ここで「協同組合原則」を「価値と実践の架け橋」と称している。
4. そこで、日本協同組合学会の今大会では、これまでの基本的価値論議の成果の上に立ち、さらにはベーク氏の研究作業の成果を考慮しつつ、国際的・国内的な協同組合運動の現状を踏まえた協同組合の価値と原則の関係および協同組合原則の改定のもつ意味を明らかにし、協同組合運動の将来を展望してみたい。
5. ベーク氏は、協同組合運動が直面するであろう(あるいは現に直面している)主要な実践的諸課題として、
- ①協同組合組織へのファイナンスの方法並びに資本調達にかかわる事項、②協同組合と国家の関係、③規模拡大と組合員参加の結合方法、④良好に機能する連合機構の整備と維持方法、⑤国境を超えた協同組合の経済協力の創設方法を挙げつつ、「価値と実践の架け橋」として「原則」の課題に立ち戻り、「将来のための原則」について主要なガイドラインを設定する。
- すなわち、協同組合運動は“価値に立脚した原則にヨリ近づく時期に来ている”のであり“価値を基礎とするタイプのヨリ一般的な原則を必要”としている。ICAレベルではわれわれは、いくつかの価値に立脚した原則(ヨリ長期的で基礎的な)といくつかの機能的な原則(ヨリ短期的でタイプや地域により適応する)を持つ必要がある。

6. 今大会の各報告は、以上のような認識に立って、ICA6原則の改定の課題の背景とその意義(前記・佐藤報告)などの実践的な作業を遂行することにより、歴史的な第30回ICA東京大会に向けての「基本的価値」論議の深化に貢献することを目的としている。

基本的価値論議から 協組原則の再検討へ

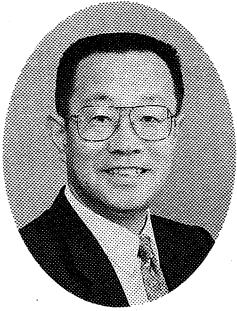
シンポジウムや個別報告、討論が以上のような提起に応え得る内容であったかをどうかの評価はさておき、私が接した報告の中では、「タイにおける協同組合運動と協同組合原則」(協同組合経営研究所・山本博史氏)、「『協同組合地域社会』と地域協同組合論」(農林中金総合研究所・鈴木博氏)などが興味深かった。

あと半年後に迫ったICA東京大会では、ベーク氏の基調報告を軸にして、各国代表による基本的価値論議と決議の採択が行われる。そしておそらく、協同組合原則の改定についても一定の言及があり、次回・英国マンチェスター大会で本格的論議が行われることが予想されている。日本協同組合学会の主要な関心とテーマも、これらに沿って深化していくものと思われる。注目していきたい。

なお、期間中の日本協同組合学会会員総会で役員改選が行われ、武内哲夫会長(奈良女子大学)に代わって、新会長に富沢賢治氏(一橋大学経済研究所)が選ばれた。

(コープこうべ生活研究所 河村修三)

協同組合運動に生きる



芸術の宝庫 ～農村に学ぶ～

篠山町農業協同組合
情報開発室室長 瀬戸洋美

私の足はその場から動かない。目の前の光景が私をその場にくぎづけさせるのである。朱色の妖怪は私に襲いかかるかのごとく、西の空を茜色に染めている。私は、半ば口をポカンとあけてただただみとれている。一種の放心状態である。こんなにも美しい夕焼けがあるだろうか、この感動をなんとか絵にしたい。私の脳裏にはモーレツな勢いで絵のイメージが走り回る。

農業、農村風景を撮り始めて10年近くになる。自然と人間の調和が織り成すドラマにはひとつのロマンがある。四季折々の風情が、そこに働く人々にやさしく、ときには厳しく語りかけ、ほほ笑みをもたらしてくれる。私は、農協の広報活動を通して多くの農家の方からお話を伺い、多くの写真を撮らせてもらった。

春の日差しをいっぱい浴びておいしいコメづくりの準備をする人。したたり落ちる汗をもろともせず夏野菜の収穫に精を出す人。黄金のじゅうたんの中、一家総出で喜びにひたっている姿。木枯らしをものともせず、ほ場でもくもくと働く人。季節、天候、時間帯によって農業のみせる顔はさまざまである。

農産物は工業製品のようにはいかない。収穫されたものは、中身こそ同じであれ形は少しず

つ違っている。それこそ作り手の情熱によって作物はどんな風にも応えてくれるからである。人間と作物、この良縁をうまくまとめてこそ、農のおもしろさがあるように思う。またそれは、人間味としての魅力を発見するときでもある。

私の取材ノートにはいくつもの発見が記されている。そのひとつに、「お行儀の悪い子供ばかりでネ、早く家へ連れて帰ってやらんと…。」と言われた農婦の言葉がある。子供とはジャガイモのことである。土を掘り起こし収穫される農婦の言葉は、生まれたばかりの赤ん坊をいたわるようで、農に対しての愛着というものを強く感じた。また、その言葉使いは小生に強い感銘を与えた。

この農婦はジャガイモの成長にどれほど手を加え、収穫をどれほど楽しみにしていたか、ということである。カゴ一杯のイモは生活の向上にすぐには結びつかないが、大地から受ける恵みに感謝し、共に生きるという喜びがそこにはあるように思えた。取材冥利とでもいうか、魅力ある人の発見がまた一人できたのである。

確かに、農業をとりまく諸情勢は決してよくない。しかし、コメ粒ひとつにしても日本2000年の歴史がある。その重みを考えると、それまでに繰り返されてきた人々の一喜一憂が思い浮かぶ。人が生きていくうえで欠かせない食料。それらの栽培に心の糧としている人々の奥深い人間味に酔いしれる。これこそ農業讃歌である。農業が減びて栄えた国は無い。今の私にできることはファインダーを通して農業のもつ素晴らしさ、偉大さを後世に伝えることである。そのため、私は今日もカメラを持ち、芸術・文化の宝庫である農を撮り続ける。

協同組合研究短信〈No.5〉

賀川豊彦研究・Ⅱ

賀川豊彦を学問の対象とし、あるいは実践上の指針を得る対象として研究する人々の集まりに賀川豊彦学会がある。賀川豊彦召天25周年を記念して昭和60年4月に発会した。

現在、会員は約200名を数える。会長は東京大学名誉教授・磯村英一先生である。先生は現在89歳、なお、かくしゃくとして後進の指導にあたられている。

先生は、昭和初頭、東京市社会局に在職中、賀川先生を東京市社会局長にお迎えすべく奔走された方である。多忙を理由に就任を断わられたが、その後、福祉行政に数多くの提言を寄せられたと先生は語っておられる。先生は同和対策事業にも深くかかわっておられ、賀川先生が在世ならば、どう考え、どう行動されるであろうかと机上の研究、討論に終始することを自らいましめておられる。この気風が学会全体のふんいきとなっている。

学会は、年1回、7月を期して総会・大会が開催される。予算・事業計画の承認と、基調講演、個別研究報告が行われる。会費は年5,000円である。事務局は、埼玉県久喜市本町1-5-3 矢島 浩先生方におかれている。

1991年度大会では、記念講演として英知大教授・岸 英司先生が「宇宙思想家としての賀川豊彦」を報告され、個別研究では、東大教授・金井新二先生の「賀川豊彦のキリスト教」、岡野幸江先生の「労働文学と賀川豊彦」他4題が報告されている。

機関誌『賀川豊彦学会論叢』は年1回の発行で現在第7号がでていいる。収録論文を見ると磯村英一「賀川豊彦に何を発見する」、岸 英司「宇宙思想家としての賀川豊彦」、野村 誠「『死線を越えて』賀川の信仰と社会理解」、小沢 温「障害者の地域生活の変遷と新しい展開について」、岡野幸江「賀川豊彦と細井和喜蔵」、杉山博昭「賀川豊彦と救癩」などが寄稿されている。

学会の代表的な活動としては、第一土曜日、午後には開かれる月例研究会をあげなければならない。会員が首都圏に多いせいかな都内が選ばれる。それも賀川先生のゆかりの地、本所賀川記念館、代々木教会、神田のYMCAが会場となっている。小さな祈りが引き続いて行われる。

最近の研究会では、第64回が昨年12月に開かれており、永く市谷教会の牧師であった金井為一郎先生と賀川先生との対話を試みられた金井信一郎先生の「賀川豊彦と金井為一郎の働き」自ら福祉施設にかかわっておられる木田市治郎先生の2回にわたる「社会福祉展望——賀川豊彦に関連して」、第67回の去る3月例会での、磯村先生の「現代の日本の社会を賀川ならばどう見るか」と続いている。磯村先生の問題提起は重く、われわれは討議の興奮に時間を忘れた。

(協同組合図書資料センター 古桑 實)

編集後記

「基本的価値」を考える(ICA大会史)は姫路独協大学・中久保邦夫先生の都合によりお休みさせていただきました。